

哲学教育ワークショップ

高等学校新科目「公共」を考える——哲学・倫理学を生かすために

村瀬 智之(東京工業高等専門学校)

いま、高校の哲学・倫理学教育が変わろうとしている。

この原稿を書いている段階で少なくとも分かっていることは、「倫理」は選択必修科目から、(ただの)選択科目となり、新しく「公共」という必修科目が設置されるということだ。

今回のワークショップでは、新しい科目「公共」の中でいかにして哲学・倫理学の教育を行っていくのか、という課題を扱う。

<テーマ選定の理由>

しかし、「公共」などという得体の知れない新設の科目をなぜ「哲学」教育ワークショップで扱うのか。そんな疑問を持たれるかもしれない。

もちろん、理由の一つは、「公共」における哲学・倫理学の教育を充実させ、より良いものにしていくためである。高校での学習内容の充実は、哲学・倫理学への理解者を増やし、学問の裾野を拡げることにつながるだろう。とはいえ、これが唯一の理由ではない。今回あえて「公共」を取り上げる背景には、「強い危機感」がある。高校の授業から哲学・倫理学にかかわる内容が大幅に削減され、未来の高校生は哲学・倫理学を学ぶ機会を失うかもしれない。そのような危機感である。

すでに高校の授業の中で哲学・倫理学に割り当てられる時間はかなり少ない。「倫理」は選択必修科目であるが、開講されている学校は6割程度に過ぎない。全体の約4割は高校3年生での開講であり、おそらく「センター対策」として、すでに選択科目として開講されている。「公共」が必修化された後、「倫理」の開講率はいま以上に減少するだろう。多くの子どもたちにとって「公共」で教えられる哲学・倫理学が人生で唯一触れる哲学・倫理学になる可能性が高いということである。

しかも、唯一の機会を提供するはずの「公共」からも哲学・倫理学が削減される可能性がある。これは、現在高校の選択必修科目である「現代社会(以下、「現社」と略記)」の内容の変遷から得られる予想である。「現社」は当初は哲学・倫理学を含んでいたものの、その内容は徐々に減っていき、現在の扱いは小さいものになっている。単位数の変化等、理由は複数あるだろうが、その一つは教える際の困難さだと言われる。哲学・倫理学の内容は、それを専門としない教師たちにとって「教えるににくい」とされる。

それに加えて、今回の学習指導要領の改訂のキーワードは「主体的・対話的な深い学び」である。哲学・倫理学の内容も「主体的・対話的に深く」学んでもらわないといけないのだ。このように言われたときの現場の教師の戸惑いは、哲学・倫理学を教えたことのある者であれば想像がつくであろう。つまり、「公共」の中で哲学・倫理学が現在のところ教えられることになっていても、教師や生徒たち、保護者や教科書出版社、そして、文部科学省といった関係者たちに哲学・倫理学の価値を理解してもらい、現場での難しさを克服してもらわなければ、「現社」が進んだ道を再び歩くことになってしまうかもしれないのだ。

予想される結果は、哲学・倫理学に一度も触れることなく高校を卒業し、おそらく、それ以降も触れる機会をもたない多くの子どもたちの姿である。もしこれが避けるべき風景なら、実現可能で、かつ、魅力的な授業を提示する必要がある。生徒たちやそれを教える教師たちが哲学・倫理学に興味をもち、その価値が理解できるような内容の授業を、である。

登壇者、そして、参加者の皆さんの力を借りて、今回のワークショップがその一助となれば幸いである。

<ワークショップの具体的な内容>

今回のワークショップでは、まず、一ノ瀬正樹氏(東京大学・教授)から「公共」の内容や理念、設置に至る経緯等を報告頂き、全体の枠組みを共有する。

その上で先進的な授業に取り組んでいる先生方に具体的な授業案のご提案をいただく。(以下、五十音順。)

神戸和佳子氏(東洋大学京北中学高等学校・非常勤講師)は、哲学的な対話の手法を用いることによって、基本的な概念や理論を用いた思考力と、「他者との協働により国家や社会など公共的な空間を作る主体」としての態度とを同時に育み、以降の学習の基礎となる一連の授業を構成する。

小嶋恭道氏(京都市立西京高等学校・非常勤講師/神戸大学大学院人文学研究科博士課程)は、「公共」がその理念において前提とする「主体」概念、および、そこに期待されている機能を明確にし、「公共」が要求する理想的な授業のモデルが、この意味での「主体」を育むためのポテンシャルを持っているか、その実践において必要なこと/ものは何かを検討する。その上で、授業案を提起し、これまでの指導要領が理想とする授業モデルとの違い、そして、それが実際に可能なのかを検討する。

山本智也氏(筑波大学附属駒場中・高等学校・教諭)は、新学習指導要領の趣旨に応答しながら、実際に現場教員が取り組みやすい(高度な専門性や膨大な労力を要求しすぎない)形の授業プランを構想し、併せてその授業ができるまでの過程を提示して、「公共」における哲学的な学びの意義を検証する。

和田倫明氏(東京都立産業技術高等専門学校・教授)は、東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会(都倫研)が作成中の、「公共の扉」の実施に向けた授業事例集の中からいくつかを紹介し、これまで蓄積してきた公民科の倫理的内容を取り扱う授業から何をどのように受け継いでいくのかを問題提起する。

<今回のWSに関わりそうな人たち>

今回のワークショップは、様々な人に関わりをもつものである。

まずは、これから高校生になる子どもたち。興味があればぜひ参加してほしい。加えて、その保護者、関係者の方々。

また、教師たち。どのような授業が可能なのか、するべきなのか、高校教員であれば、なるべく早く知りたいことであろう。大学の教員も、自分たちの学生がそれまでにどのようなことを学んできたのか、学んできていないのか、にかかわる事柄であり、自らの授業計画にも影響を与えることであろう。

さらに、若手研究者たちや教師志望の大学生たち。すでに非常勤講師等として教壇に立っている若手研究者や、これから初等中等教育に携わろうとしている学生たちにとっては、哲学・倫理学の内容についての先進的な教育手法を学べる点でも興味深いものであろう。

¹ 文部科学省による教育課程の編成・実施状況調査による。「平成27年度(公立高等学校)調査結果」、6頁。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2016/03/11/1368209_02.pdf (accessed 2018-02-19)